

リスとムササビ No.14

SCIURID INFORMATION

April, 2004

CONTENTS

リ・ムネット活動報告	ニホンリスのワークショップとシンポジウム報告	繁田 真由美 1
海外リス事情	イギリスの公園で～ハイイロリスとの一場面	西村 かおり 4
特集「巣箱よもやま話①」	楽しい巣箱	深町 修 5
	ひとつの巣箱を利用した動物たち	山口 喜義 8
	鏡でわかるムササビの巣箱利用	湯沢 八千代 11
		岩崎 雄輔 11
		浅利 裕伸	
		中野 智紘	
		 12

お知らせ INFORMATION



リ・ム・ネ・ツ・ト・活・動・報・告

ニホンリスのワークショップとシンポジウム報告

繁田 真由美

Mayumi Shigeta

国内初の試み

2003年8月23日（土）と24日（日）、東京都武藏野市にある井の頭自然文化園の資料館2F会議室において、「ニホンリスのワークショップとシンポジウム」が開催されました。

真夏の太陽がぎらぎらと照りつける中、武藏野の面影が残る木立に囲まれた園内に全国から多数の参加者が集まりました。ニホンリスたった1種に関するこのようなワークショップとシンポジウムは、国内で今まで行われたという話は聞きません。今回、立場の異なるさまざまな方々が一同に会し、2日間にわたってとても密な時間を過ごすことになりました。

ワークショップとシンポはどう違う？

プログラムをみると、初日は「ヒトとニホンリスの関係を考える—ニホンリスの生態と保全」と題し、ニホンリスに関わる研究者や学生、教育関係者、飼育関係者の方々が参加し、少し専門的な内容で講師の方々に講演していただきました（写真1）。2日目は「ニホンリスってどんな動物？—ニホンリスとのつきあい方を考える」と題し、日頃から井の頭自然文化園に親しんで来られた周辺住民の方やリスに愛着を感じる愛好家の方を含んださまざまな立場の方々が参加し、わかりやすい内容で講師の方々に講演していただきました。両日のべ参加者数は約120名でした。その中にはもちろんリ・ムネットの会員も多く含まれて

ニホンリスのワークショップと公開シンポジウム ~~ プログラム ~~

■主催：東京都井の頭自然文化園

■協力：（財）東京動物園協会ゴリラ基金、リス・ムササビネットワーク

《ワークショップ》---- 「ヒトとニホンリス－ニホンリスの生態と保全」

13:00 開会 関 勇司（多摩動物公園園長）

<セッション-1 動物としてのニホンリス－ニホンリスのいま！（座長：矢竹一穂）>

13:10-13:35 「ニホンリスの行動生態」林 典子（森林総合研究所）

13:35-14:00 「ニホンリスの繁殖生物学」西垣正男（福井県自然保護センター）

14:00-14:25 「ニホンリスの遺伝的研究」押田龍夫（中華民国東海大学）

<セッション-2 リスとヒトの関係について（座長：林 典子）>

14:30-14:55 「各地での保全事例」矢竹一穂（株式会社セレス）

14:55-15:20 「守山での保全活動の取り組み」北山克己（守山リス研究会）

15:20-15:45 「ニホンリスの飼育と展示」佐々木真一（井の頭自然文化園）

<セッション-3 私たちは何をめざすか（座長：柳川 久）>

15:55-16:15 「リスと市民の付き合い方－北海道帯広市の事例」柳川 久（帯広畜産大学）

16:15-16:45 討論、まとめ

《シンポジウム》---- 「ニホンリスってどんな動物？－ニホンリスとのつきあい方を考える」

13:00 開会 関 勇司（多摩動物公園園長） 総合司会 桜田道雄（井の頭自然文化園園長）

<セッション-1 動物としてのニホンリス>

13:10-13:35 「ニホンリスという動物」林 典子（森林総合研究所）

13:35-14:00 「ニホンリスの遺伝的研究」押田龍夫（中華民国東海大学）

<セッション-2 リスとヒトの関係について>

14:00-14:20 「各地での保全事例」矢竹一穂（株式会社セレス）

14:20-14:40 「守山での保全活動の取り組み」北山克己（守山リス研究会）

14:40-15:00 「ニホンリスの観察会」小林 豊（自然教育研究センター）

15:00-15:20 「ニホンリスの飼育と展示」伊東員義（井の頭自然文化園）

<セッション-3 私たちは何をめざすか（座長：柳川 久）>

15:30-15:50 「リスと市民の付き合い方－北海道帯広市の事例」柳川 久（帯広畜産大学）

15:50-16:30 討論、まとめ

いました。

両日とも最後には柳川久氏（写真2）を座長として「私たちは何をめざすか」というタイトルで話し合いの時間が設けられました。講師の方々をパネラーに迎え、会場の方々との積極的な意見交換が行われました（写真3）。その話し合いの中心となつた議題は、ニホンリスの園内放飼の問題でした。

「リスの森構想」とは

井の頭自然文化園には「リスの小径」という展示施設があります。施設内に入ると、野生下では出会う機会の少ないニホンリスが目の前で走り回っていて、とても身近に見ることができます。これは1985（昭和60）年にスタートした「リスの森構想」という事業の一端階です。「リスの森構想」とは「都市における野生動物との出会い、武藏野の自然との触れ合いをめざす」という理念の中で、かつて当園の周辺に見られたニホンリスとの触れ合いを通して自然や環境への理解を深めて欲しい」

という構想で、

第1期：飼育・繁殖し、

第2期：人とのふれあいをはかり、

第3期：さらに繁殖を繰り返しつつ人とのふれあいを深めていき、

第4期：園内に放す（放飼する）。

という4つの段階を踏まえた事業が進められています（井の頭自然文化園、1988）。現在の「リスの小径」は第3期にあたるそうです。最終的には園内にニホンリスを放飼することをめざしていますが、その前に、井の頭自然文化園側の意向で今回のワークショップとシンポジウムの開催が企画されました。

私たちは何をめざすか

「私たちは何をめざすか」という投げかけに、研究者からは次のような意見が出されました。ニホンリスは固有の歴史（進化の道すじ）を持つ種であり、ニホンリスが持っているあらゆる形質およ

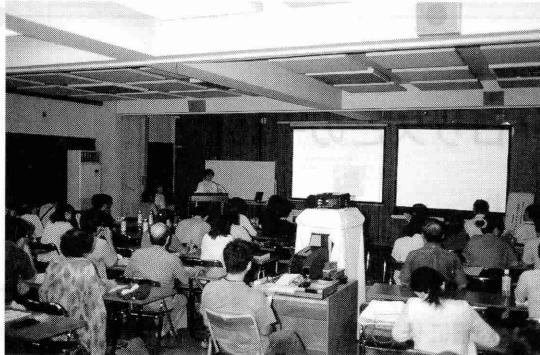


写真1 林典子氏の講演の様子（撮影：尾高伸子）

び遺伝情報は、自然の試行錯誤の結果創出されたかけがえのないものであり（押田，2004）、その遺伝的多様性を守るという面から、飼育下で増殖され遺伝的に類似した（あるいは均一な）特徴を持つリスを放すことは生態的な攪乱を招くこと、またこのような事業を動物や自然保護に直接かかわる公の機関が行うことは、他の機関や一般の市民にも放飼事業の容認やペットの遺棄を誘発しかねない危険性があること、保全のための再導入も遺伝的な地域差を考えると慎重に行う必要があること、など厳しい反対意見や慎重論が出されました。「園内放飼」がかかえる問題点が研究者から出された反面、一般の方からはどうしてそれが悪いことなのかという疑問の声があがりました。私は、この討論の中で何より「ニホンリス」という種に対する認識が研究者と一般の方ではかなりの開きがあるのを感じました。このことは当会のようなNGOが今後の状況改善のため、ニホンリスの今おかれている現状や種に対する認識など、一般の方にも伝わりやすい形で普及啓蒙していく必要性をひしひしと感じた場でもありました。

これからの方向性

「リスの小径」のニホンリスたちは展示のおかげでとても身近に見ることができます。しかし、群れているニホンリスの姿は野生とはかけ離れ、誤解を招きかねない姿もあります。健全な姿での生態的展示を目指して欲しいとの声もあがりました。

た。当初、放飼が計画された時代とは背景も異なり、ニホンリスの生態に関するさまざまな知見や情報も収集されてきています。今回の話し合いからは、今まで



写真2 討論の座長を務めた柳川久氏（撮影：尾高伸子）

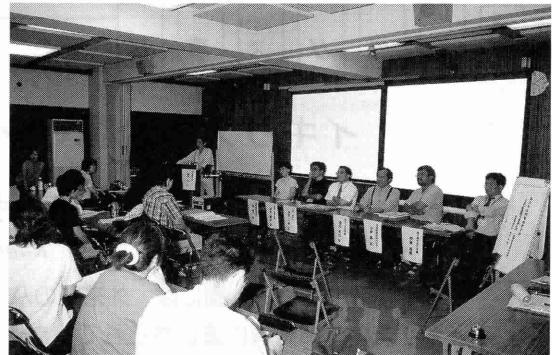


写真3 話し合いの様子（撮影：尾高伸子）

の公園側の事業を充分評価し、展示施設としての素晴らしい面や繁殖技術の確立という大きな功績を生かしつつ議論を重ねていき、今後の方向性を見いだすことが重要であるという締めくくりで終わりました。これから公園側の動向に注目したいと思います。

ポスター展もありました

資料館1Fでは、「ニホンリスの今！」と題するポスター展が2003年7月20日から8月31日までの期間、開催されました。出展者の多くはリ・ムネットの会員でした。夏休み期間中ということもあり、園内を訪れた方々の目を楽しませてくれたことでしょう。

おわりに

最後になりましたが、講師の方々には無理難題をお願いしたにもかかわらず、講演から報告集の作成まで、全面的にご協力いただきました。ありがとうございました。また、当日お手伝いいただいた会員の皆さん、急なお願いにもかかわらず快く引き受け下さりありがとうございました。今回のワークショップ&シンポについて、参加できなかった多くの方々にもお伝えするため、井の頭自然文化園（当時）の伊東員義氏のもとで報告集の作成が進められ、この春、完成致しました。ニホンリス1種に的を絞った内容の濃い報告集です。入手方法については本号に同封した案内をご覧下さい。

■引用文献

- 井の頭自然文化園. 1988. 井の頭の“リスの森”構想, どうぶつと動物園, 40 (12) : 4-7.
押田龍夫. 2004. ニホンリス *Sciurus lis* の遺伝学的研究: リス属 (*Sciurus*属) の系統進化とニホンリスの系統的位置について. (東京都井の頭自然文化園「リスワークショップ実行委員会」, ニホンリスのワークショップとシンポジウム報告集2003), pp. 9-20. 東京.

(繁田真由美: リス・ムササビネットワーク事務局／株式会社野生生物管理)



イギリスの公園で～ハイイロリスとの一場面

西村 かおり

Kaori Nishimura

イギリスの多くの公園には、外来種のハイイロリスが生息しています。在来種のキタリスは駆逐されイギリスの北部地域に追いやられてしまっています。「公園にリスがいて」と日本人がうらやましがる本当の姿は外来種のリス達だったのです。そんなイギリスの公園で、その帰化の歴史の長さからすでに市民権を得てしまったハイイロリスを取り巻く一場面について、西村さんにご紹介いただきます。

かれこれ4年前に、私が企業研究留学中の妹一家を訪ねたイギリス北部の地方都市シェフィールドは、ロンドン・セントパンクラス駅から快速電車で約3時間、産業革命当時は近郊のマンチェスターと共に栄えた街です（図1）。しかし現在では、深刻な経済不況のためか繁華街では失業者と“TO LET”（貸家）の看板がずいぶんと目立つてい



図1 シェフィールドの位置

ました。でもひとたび郊外へ出れば見事に管理された公園や古館の庭がいくつも広がり、イギリス人の自然環境や歴史に対する保護意識の高さを感じました。

そんな植物公園の1つに当時1歳半の甥っ子をつれて出かけた時の事です。公園のカシの木立の中を数匹のハイイロリス（写真1）が走るのを見て、地元の保育園に通っていた甥っ子は「スクイロー」と呼びかけ喜んで近づいていきました。公園のリスは人に馴れているらしく、小さな子供が近づいても逃げず、それどころかその子の手からカラ付きの落花生を手渡しで受け取って食べていました。よく見ると公園のあちらこちらには、地元のNGOのレンジャーが樹木や野鳥の巣箱の世話をしていましたから、このリス達もこうした人達の保全の目が行き届いていたのでしょう。

しかしほんの一瞬私達が目を離した隙に甥っ子

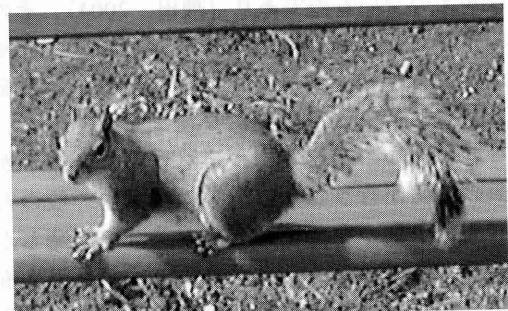


写真1 公園のハイイロリス

が突然泣き出し、見ると指先から血がにじんでいました。落花生を手渡すタイミングがずれてリスに噛まれたようでした。

「スクイロウ…ビチュウ…（リスに噛まれたあ）」と赤ちゃん言葉で状況を訴えながら泣いている甥っ子のもとに、近くにいたNGOボランティアのおばさんが近寄って来て「リスは歯が出ているから偶然あなたの指に当たってしまったの。噛もうと思った訳ではないのよ」と慰めてくれました。

この見事なフォローのお陰で甥っ子の中からリスに対する恐怖は消えたようで、その後も彼はリスに喜んで近づいています。

シェフィールドはどちらかというとWORKER（労働者）の目立つ街で、環境保全活動にたずさわるNGOの人達も決して研究者や専門家ばかりではなく、多くがどこにでもいる普通のおじさんやおばさんでした。しかしそんな普通の人々が持っている環境教育に対する意識の高さは、日本人の私からすればそううなもので、こうしたイギリスの一般庶民の自然にかかる気持ちが、例え外来種のハイイロリスであっても、リスがのびのびと走り回る近所の木立を支えているのだと思いました。

（西村かおり：全国カヤネズミ・ネットワーク
／社団法人大阪自然環境保全協会）



楽しい巣箱

深町修

Osamu Fukamachi

得体の知れない動物

カメラを持って梯子を登った。得体の知れない動物が巣箱の中にいる。今日こそは写真を撮ってやろうと思った。梯子を登る際に音がしたためか、その動物が穴からひょっこり顔を出して私とにらめっこ。でカメラを構えてパチリ。音に驚いてかその動物は穴から飛び出して滑空して逃げていき他のスギの木に登って行った。するとその木の高い所に架けていた大きな巣箱からオオコノハズクが飛び出してきた。これにもびっくりしたが、得体の知れない動物はニホンモモンガだったのである。1996年4月14日のこと、その写真がこのニホンモモンガの写真（写真1）であり、後日、読売新聞に掲載されるし、山口県のレッドデータブックにも掲載された非常に貴重なものである。

山奥に小屋を建てて休日に遊びに行き、巣箱を架けては小鳥などが入るのを楽しみにしていた。ある時、妙な動物が巣箱から顔を出した。リスに似ているが何だかわからない。巣箱の木には蛇返しが付けてあり、下からは登れないはずなのである。そっと巣箱の蓋をとると、中にスギの樹皮を剥いで細い纖維にしたもので丸い巣を作っていて（写真2）、それから顔を出して引っ込んだ。一体



写真2 ニホンモモンガの巣材

何だろう。私は話に聞いたことがある“ヤマネ”だろうかと思っていた。しかし、ヤマネが蛇返しのある巣箱に入れるだろうかと疑問も感じていた。結局専門家に聞いてニホンモモンガであることがわかり、県内では10年以上確認されておらず、もう見ることができないのではないだろうかと思われていたそうであった。

巣箱は、山口県周南市鹿野からさらに東北に6km行った島根県との県境付近、周南市鹿野上に架設している（図1）。海拔約500m、そばに錦川の支流にあたる仁保川が流れているスギやヒノキの人工林と天然林が混在している環境にある。巣箱はヤマガラ用に作ったもので内側が14cmの正方形で穴の中心の高さは底から13cm、穴の直径は32mmである。しかし、穴はニホンモモンガが齧って大きくしていた。

その後ニホンモモンガは何回も見ることができ、一つの巣箱に二匹いることもあった。また、別の巣箱から出て滑空したニホンモモンガに子供が抱っこされているのも見ることができた。しかし、2002年に新しい巣を見ることができたが、姿は数年見たことがなくまことに寂しいかぎりである。

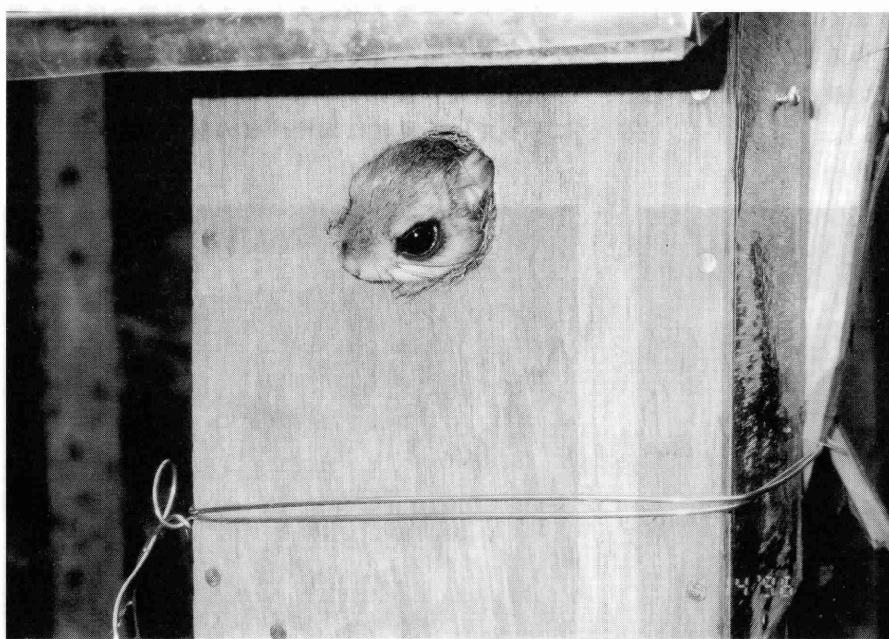


写真1 巣箱から顔を出したニホンモモンガ（1996年4月14日）

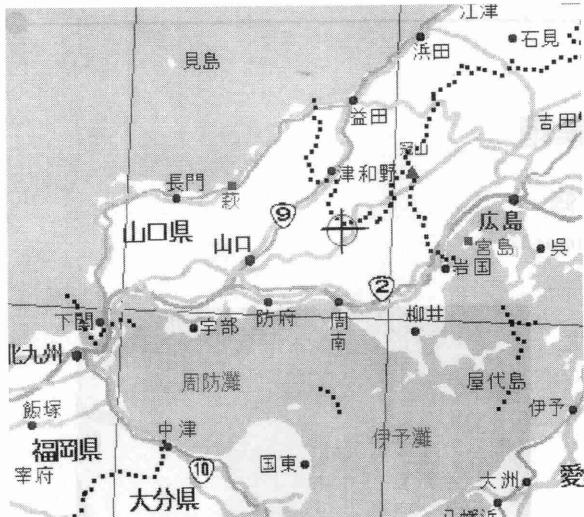


図1 巣箱を架設した周南市鹿野上の位置

手作り巣箱で自然に親しむ

私は30年余り前に、“これからは多分週休二日制になり十分に余暇が楽しめる時代が来る。その余暇を山で過ごそう。”と思って山を買い、小屋を建てた。その後時代は確実に私が予想したようになり、2002年に定年を迎えた今もその山小屋へ出かけては楽しんでいる。

山を楽しむのは単に自然の環境を楽しむこともあるが、鳥や動物との触れ合いがより楽しい。そういうことで巣箱を思いつき14年前から試行錯誤で巣箱作りを始めた。その後改良を重ねて大小何十個か作った。巣箱の背の部分はスギ丸太を半割りにして加工し、V字型の切り込みを入れて取り付けた際の安定を良くしている。こうすると濡れるのは心材部分となるので腐りにくい。屋根の下側には入れ子を付け巣箱にうまくはまるようにして屋根がずれないようにしているし、上にはステンレスの板または腐食しにくい鉄板を貼っているので長期間使用できる（写真3）。

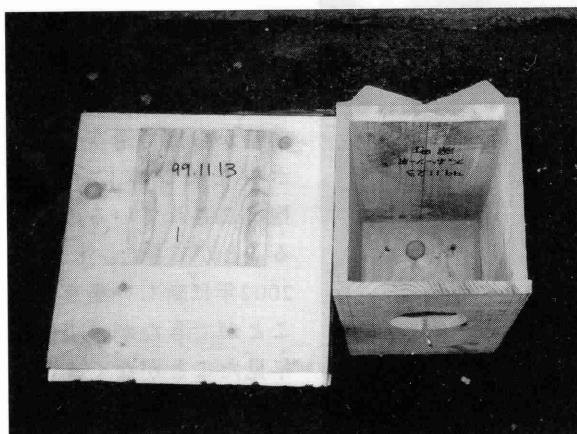


写真3 改良を重ねた手作り巣箱



写真4 シジュウカラのヒナ

巣箱の住人はさまざま

小さい巣箱にはヤマガラが一番よく入り、次にシジュウガラが入る（写真4）。適当な間隔を開けると半分以上は利用する。そしてヒメネズミであろうネズミも利用する（写真5）。大きな巣箱（内側が30cmまたは25cmの正方形）にはオオコノハズク（写真6）、オシドリ（写真7）、ムササビ（写真8）が入る。

大きい巣箱はアオバズク用と思って架けたのであるが、何も入らないで諦めていると背の部分が腐ってきて（最初は作り方がつたなかった）穴が開いてしまった。ところがそこから何やら巣材が見えた。確かめようと思って登っていくと何とムササビが飛び出してきた（1995年11月のこと）。それ以来ムササビは住み着いて繁殖もし現在に至っていて私が一番大事にしている住人である。

オオコノハズクは、これも最初は何かわからなかつたが専門家に聞いてオオコノハズクとわかつた。巣箱の中で繁殖している例はほとんどないということと、親子がいるところを巣箱の屋根を開けて写真を撮っても親が逃げなかつたということで読売新聞に掲載された（1998年5月31日。写真に写っている巣材はムササビのものである。つま

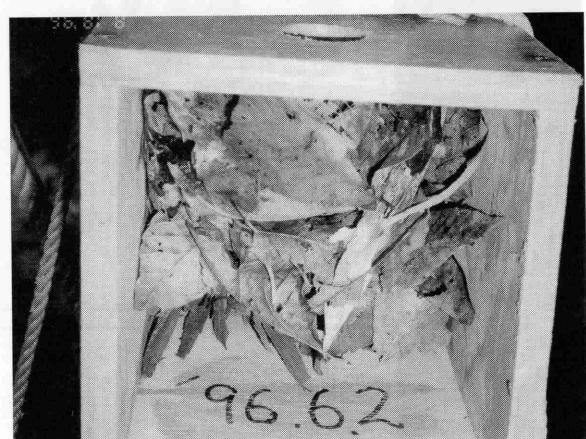


写真5 ヒメネズミの巣材

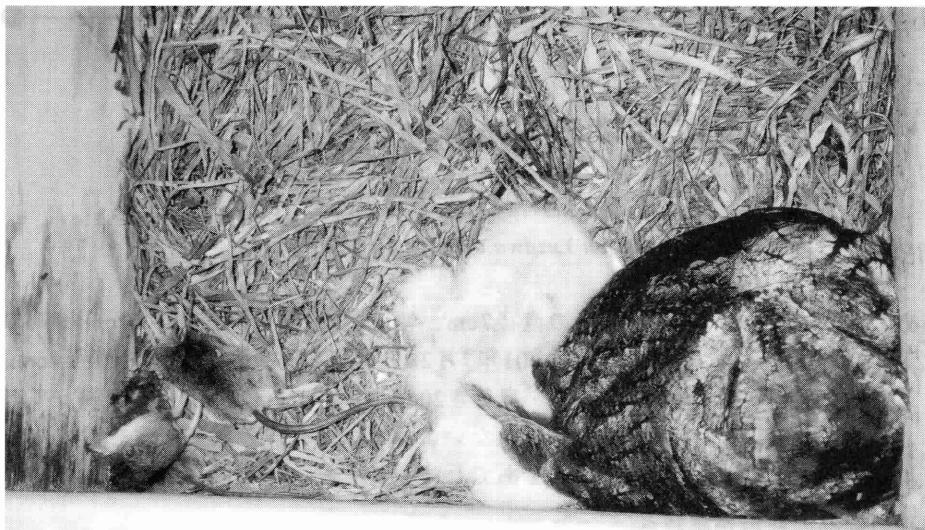


写真6
オオコノハズクとヒナ、
それと餌となるネズミ
(1998年5月31日)

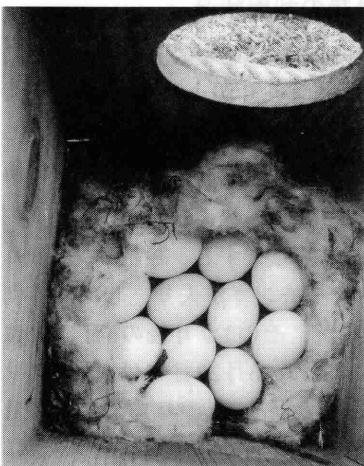


写真7
オシドリの卵

り、ムササビの巣箱をオオコノハズクが利用したことである）。その後5年連続で営巣・繁殖したがどうしてか2003年は利用しなかった。

オシドリも入った。最初はもしかしたらムササビがいるのではないかと思って屋根を開けてみると大きな卵があり、びっくりした。もちろんオシ

ドリは知っているが、現地では一度も見たことがなく、何の卵かわからなかった。その後専門家の話で多分オシドリであろうということだった。そのうち親の姿も確認できて間違いなかった。これも3年連続で営巣したが何故か2003年は利用しなかった。

最近困っているのは巣箱をスズメバチが利用することである。2003年は何と6カ所もスズメバチが入ってしまった。ムササビも場所を追い出されて別の巣箱に移ったようである。私や友達が刺されたので今年こそは入らないようにしようと思っている。

楽しい巣箱

巣箱は楽しい。まず作る楽しみがある。道具を揃えて色々と改良しては巣箱作りを楽しんだ。そしてやはり動物が利用してくれるのが嬉しい。自然の中で過ごすのは楽しいが、生き物と触れ合えるというのはさらに楽しい。邪道かもしれないが、巣箱の屋根は開けられるようにしてあり時々のぞいてみるが、いつもワクワクする。周辺の山に木

はあるが、動物が利用できる樹洞があるような大木はほとんどない。したがって巣箱は樹洞を利用する動物には大変ありがたいものに違いない。動物が助かり、架けた人が楽しむ。まさに一石二鳥である。まだ長い人生を巣箱と共に楽しむつもりである。

(深町 修：山口県周南市在住)

※巣箱にかかる情報交換をしませんか。お便り（メール）お待ちしています。

E-mail : nmg-o.f@ccsnet.ne.jp



写真8 ムササビ仔 (二匹いる)



特

集

ひとつの巣箱を利用した動物たち

山口喜盛・湯沢義信・湯沢八千代

Yoshimori Yamaguchi, Yoshinobu Yuzawa and Yachiyo Yuzawa

はじめに

山荘の前に架かっていた野鳥用の巣箱にムササビ類の囁き跡を見つけたことがはじまりで、私たちは新たに巣箱をかけ直してどんな動物たちが入るのか試してみました。そうしたところ、架設してから1年あまりの間に4種の動物の利用が確認されました。野鳥用の巣箱は鳥類以外にも、哺乳類、昆虫類、両生類などいろいろな動物に利用されることが知られていますが、ひとつの巣箱に、短期間で違う種の動物が利用したという観察例はあまりないと思うのでここに報告します。

巣箱の架設

この巣箱は2001年2月14日に、神奈川県丹沢山地の標高約500mに位置する山荘のテラスの前に架設しました。巣箱のサイズは、入口の穴が直径約5cm、高さは30cm（表面）と45cm（裏面）、幅と奥行きは20cmで、ミズキの5mくらいの高さに架設しました（テラスからは3.5mくらい）。周辺はスギやヒノキの植林地でしたが、川や沢の周辺には落葉広葉樹が残されていました。この巣箱（No.1）のほか、No.2（2001年3月3日に架設）=入口の穴

の直径7cm、幅・奥行き30cm、高さ40cmとNo.3（2001年7月28日に架設）=入口の穴の直径4cm、幅・奥行き20cm、高さ25cmの巣箱（穴を囁って広げられないように、アルミの灰皿に穴を開けたものをあてた）も架けました。

巣箱の利用状況

この報告は、巣箱（No.1）を架設した2001年2月から2002年4月までの14ヵ月間の観察によるものです。観察は週末に行われ、その結果、ニホンモモンガ、ムササビ、テン、オオコノハズクの利用が確認されました（表1、写真1～4）。

その様子を簡単に説明しますと、設置から1ヵ月くらいで1頭のニホンモモンガが入り、しばらく利用していたようですが、その3ヵ月後の6月16日には巣穴が囁って広げられ、6月22日には1頭のムササビに替わっていました。その後9月15日まで毎月ムササビの利用を確認していましたが、11月3日には2頭のニホンモモンガが入っていました。そして11月30日の朝にはまたムササビが、ところが翌日の12月1日にはまたニホンモモンガ2頭が出てきました。そして12月22日から1月24日までは、またムササビが利用していて、驚いたことに2月16日には1頭のテンが巣箱から出てきました。このテンは3月3日まで確認し、4月7日の昼間には1羽のオオコノハズクが中で寝ていました。そして4月10日には別のオオコノハズクが給餌にやって来ました。



写真1 顔を出したムササビ（撮影：湯沢義信）

表1 巣箱（No.1）の利用状況

年月日	種名	観察
2001年2月14日	—	巣箱架設
3月19日	ニホンモモンガ	巣穴から1頭が顔を出す
4月14日	ニホンモモンガ	18:40 巣箱から1頭が出る
6月16日	なし	巣穴が囁られて広がっていた
6月22日	ムササビ	10:40 巣穴から1頭が顔を出す
6月30日	ムササビ	10:30 巣穴から1頭が顔を出す
7月13日	ムササビ	昼頃、巣穴から1頭が顔を出す（写真1）
8月12日	ムササビ	18:50 巣箱から1頭が出る
9月15日	ムササビ	18:15 巣箱から1頭が出る
11月3日	ニホンモモンガ	巣穴から2頭が顔を出す（写真2）
11月30日	ムササビ	5:35 巣箱に1頭が入る
12月1日	ニホンモモンガ	17:05 2頭が巣箱から出る
12月2日	ニホンモモンガ	17:50 1頭が巣箱から出る
12月22日	ムササビ	6:45 1頭が顔を出す
12月30日	ムササビ	6:27 1頭が顔を出す
2002年1月5日	ムササビ	17:10 1頭が巣箱から出る
1月6日	ムササビ	1頭が巣箱から出る
1月24日	ムササビ	
2月16日	テン	18:26 1頭が巣箱から出る
2月23日	テン	18:10 1頭が巣箱から出る
3月3日	テン	18:10 1頭が巣箱から出る（写真3）
3月9日	なし	
4月7日	オオコノハズク	昼間、巣の中で1羽が眠っていた（写真4）
4月10日	オオコノハズク	18:23 巣中の1羽に別の1羽が給餌
4月14日	なし	

この間、No.2の巣箱では2001年7月13日、11月24日、2002年1月6日、1月26日にムササビの利用を確認しました。そして3月16日以降は連続して利用し、子育ても行いました。No.3の巣箱には2001年11月9日、11月25日にニホンモモンガの利用を確認しました。

巣箱を利用する動物たちの関係

ムササビとニホンモモンガが同所的に生息する地域は少ないらしい（川道、1997）

ですが、丹沢山地では、巣箱の利用によって他の2カ所でも両種の生息を確認しています。今回と同じように同じ巣箱を交替で使ったり、5mから十数m離れた巣箱で両種が同時に利用しているところもあります。このようなことから、丹沢山地のムササビとニホンモモンガは、同じ環境で生息しているものと思われます。

両者の関係が気になるところですが、巣穴が小さいうちはニホンモモンガが利用し、やがてムササビが入り口を囁って広げて巣を奪ってしまい、しばらくすると、またニホンモ

モンガがちゃっかり入っているようなことから、体の小さいニホンモモンガの方が劣勢のようですが（川道、1997）、ニホンモモンガもまったく負けているわけではないようです。

以前、オオコノハズクのヒナが巣立った一週間後にムササビが入ったスギの樹洞を観察したことがあります（西川・山口、1998）、このムササビはオオコノハズクの育雛が終わるまで、4mほど離れた木にかけてある狭い巣箱の中に親子3頭で住ん

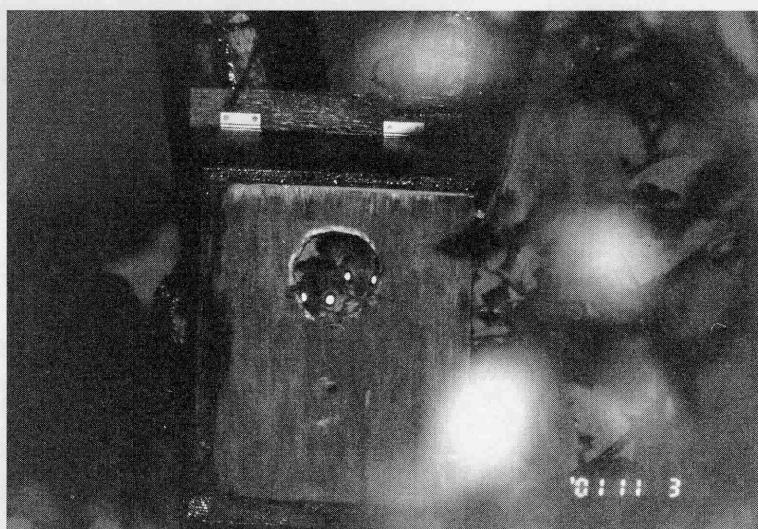


写真2 顔を出した2頭のニホンモモンガ（撮影：湯沢義信）

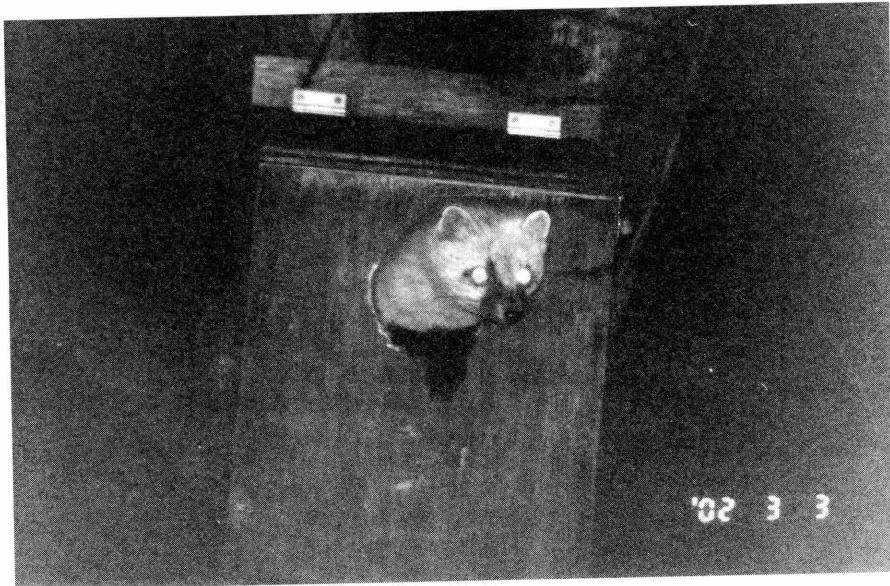


写真3
巣箱から身を乗り出したテ
ン（撮影：湯沢義信）

でいました。この樹洞は、オオコノハズクが入る前はムササビが利用していたものです。オオコノハズクが繁殖のために一時的に巣を奪ったというよりも、繁殖中だけムササビが巣を譲ってあげたのだろうかと思いたくなってしまいます。こんなに近くに住んでいるのに争うのを見たことがありません。

樹洞や巣箱を利用する動物たちが、森林の中で共存するためにどのような駆け引きを行っているのか興味がわいてきます。

おわりに

このように、短い期間にもかかわらず4種の鳥と獸が同じ巣箱を利用してくれて、私たちを楽しませてくれました。同じ種が長く利用しなかったの

は、人の出入りのある山荘のすぐ前に巣箱があつたことや観察の影響も考えられると思いますが、週末しか人がこないので、またすぐに他の種が利用したのかも知れません。

巣箱を利用したのは樹洞を利用する夜行性の動物たちでした。周辺には樹洞のできるような大きな木が見あたらないので、よほど昼間の寝床に困っているのでしょうか。あと何十年かかるかはわかりませんが、早く周りの木が大きくなってしまいと思うばかりです。

■引用文献

- 川道武男. 1997. レッドデータ日本の哺乳類. 日本哺乳類学会編. p70-71. 文一総合出版. 東京.
西川敦人・山口喜盛. 1998. 神奈川県におけるオオコノハズクの繁殖初記録. 日本野鳥の会神奈川支部研究報告 BINOS vol.5:57-62.



(山口喜盛: 神奈川県丹沢湖ビジターセンター、湯沢義信・湯沢八千代: 神奈川県秦野市在住)

写真4
顔を出したオオコノハズク（撮影：湯沢義信・ナイトショット付きビデオによる）



特

集

鏡でわかるムササビの巣箱利用

岩崎 雄輔・浅利 裕伸・中野 智紘

Yusuke Iwasaki, Yushin Asari and Chihiro Nakano

近年、巣箱は樹洞性哺乳類の研究に多く利用されるようになってきました（安藤ら, 1983; 柳川, 1994; 佐藤, 1997）。しかし、巣箱内の動物の在否を実際に確認することは難しいことです。そこで私たちは、動物にストレスを与えず、しかも容易にできる巣箱内の確認方法を考えました。それは、巣箱の内部に鏡を設置し、その反射によって動物がいるかいないかを見るというものです。

今回、東京都青梅市の御岳ビジターセンター（以下、ビジターセンターとする）の職員の方のご好意により、以前からよく利用が確認されていた巣箱（実際の利用期間は3年）が劣化したため、代替として「鏡入り巣箱」の架設の了解をいただきました。巣箱の交換は、ムササビの利用が確認されていない2003年3月に行いました。巣箱を架設する高さは、ビジターセンターの2階からよく見られる高さ（約5m）としました（写真1）。



写真1 巣箱架設風景

巣箱には、厚さ約1.2cmのコンパネ材を使用しました。寸法は、前面縦35cm×横20cm、後ろ面縦44cm×横20cm、底面20cm×20cmです。上部の蓋は蝶番で開閉式にして、出入り口は直径8cmの円にしました。鏡の寸法は、縦10cm×横9cmで、巣箱内部の後ろ面に木ネジと針金で固定しました。

そして巣箱を木に架設したあとで、鏡を固定している針金の長さを調節して鏡の角度を整え、ビジターセンターの2階から巣箱内の底部が見えるようにしました（図1）。

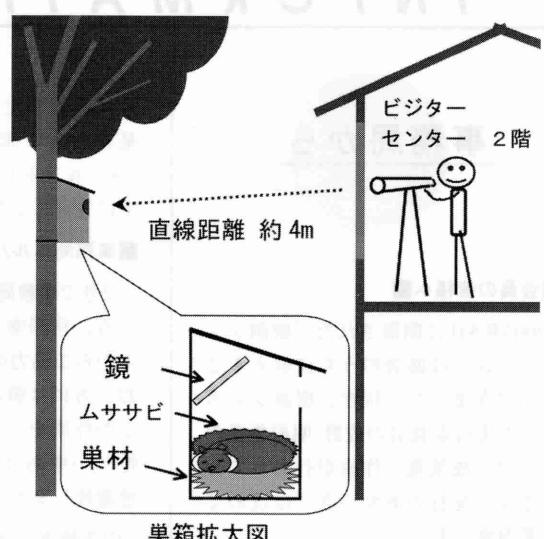


図1 イメージ図

今回の試みで「鏡入り巣箱」に換えてからも、継続的にムササビの巣箱利用が観察されています（ビジターセンター職員、私信）。観察の仕方は、ライトで照らしながら双眼鏡やプロミナーで巣箱の入り口をのぞきます。もしムササビがいる場合はその背中や尾が見え（写真2）、いない場合は巣箱の底や巣材が見えます（写真3）。

今回は、巣箱と同じ高さに観察者がいるという設定でしたが、下方から見上げるような位置からの観察には今後改良が必要でしょう。

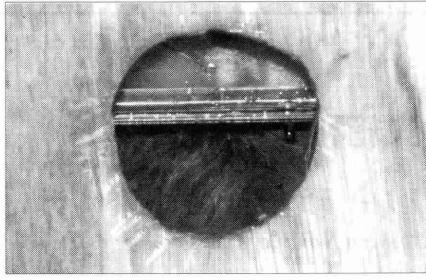


写真2 ムササビ在（ムササビの体毛が見える）

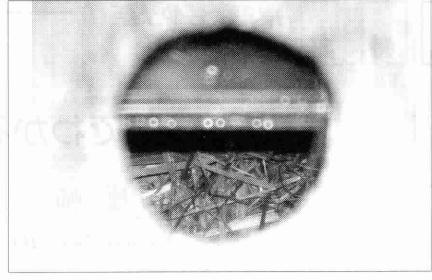


写真3 ムササビ不在（巣材であるスギの樹皮だけが見える）

■引用文献

- 安藤元一・船越公威・白石 哲. 1983. ムササビの巣穴利用性. 九大農学芸誌, 38: 27-43.
佐藤洋司. 1997. 栗山地域における小鳥用巣箱を利用した哺乳類の分布調査. 栃木県立博物館研究紀要, 14: 21-31.

柳川 久. 1994. 小鳥用巣箱を用いたエゾモモンガの野外研究. 森林保護, 241: 20-22.

(岩崎雄輔: 福島大学大学院 生物学教室、浅利裕伸: 帯広畜産大学大学院 野生動物管理学研究室、中野智紘: 東京農業大学大学院 家畜飼養学研究室)

お 知 ら せ INFORMATION

事務局から

■会員の皆様へ■

2003年5月に開催された「樹洞シンポジウム」は盛会のうちに終えることができました。現在、樹洞シンポジウム実行委員会の佐野 明編集長のもとで、成果集の作成が行われております。発行のあかつきには改めてご案内致します。

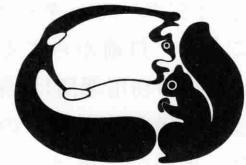
また、本号でご報告した「ニホンリスのワークショップとシンポジウム報告集2003」については、完成しております。入手方法については、本

号に同封した案内をご覧いただき、是非ともご購入をお勧め致します（メールアドレスをお持ちの方にはすでに先行してご案内致しました）。

■事務局ヘルパーについて

12号で事務局ヘルパーを募集したところ、宮澤幸子さんと鈴木三枝子さんからご協力の申し出がありました。お二方には樹洞シンポのテープおこしの作業をしていただきました。お忙しい中ありがとうございました。感謝致します。

引き続き、会報の編集作業（メールアドレスをお持ちの方）や発送作業（お近くにお住まいの方）をお手伝いいただける方を募集します。ご協力のほどお願い申し上げます。



リス・ムササビネットワーク

■原稿、イラスト、表紙写真募集！

リス類に関する投稿原稿を募集しています。書式・内容等は自由です。また、イラスト（リス類だけでなく、自然物の描写ならなんでも）、表紙写真（簡単なコメントをつけて）も募集します。お気軽に事務局までお寄せ下さい。

本号の表紙写真：

よだれを垂らすムササビ

撮影：山口喜盛

丹沢山地に架けた巣箱で、昼間巣箱から顔を出したまま眠っているムササビを見つけました。あまりに気持ちが良かったのでしょうか、よだれを垂らして寝入っていました。この巣箱では時々、顔を出してたり、尻尾だけが出ていたりします。（山口談）。

リスとムササビ

SCIURID INFORMATION

No.14

April, 2004

- 発 行 リス・ムササビネットワーク
- 編集委員 安藤 元一 押田 龍夫 川道 武男
川道 美枝子 柳川 久
- シンボルマーク 大高 利之
- 編 集 繁田 真由美
- 編集協力 水野 昌彦 三笠 夏樹 三笠 晓子
- 発 送 繁田 真由美
- 郵便振替口座 番号 00240-5-29219
- 加入者名 リス・ムササビネットワーク

【編集後記】 ◆2003年発行予定の会報が大幅に遅れてしまい申し訳ありませんでした。また原稿を早々にお寄せ下さった皆様、本当に申し訳ありませんでした。重ねてお詫び申し上げます。今年は遅れを挽回したいです。◆前号からコウモリの会事務局の方々に何かとお世話になりましたが印刷をデジタル化にしてみました。◆巣箱の話題はいかがだったでしょうか。今後も取り上げたいのでしどし観察情報をお寄せ下さい。◆次号は樹洞を利用するリス科動物についてまとめた企画です。

□ リス・ムササビネットワーク事務局 □

〒227-0066 横浜市青葉区あかね台1-21-14-B 繁田真由美
TEL&FAX 045-989-1004 E-mail BXQ01747@nifty.ne.jp

©2004 Japan Network of Sciurid Researchers